

新資料

洞谷山永光寺蔵
伝瑩山禪師訓点

仏垂般涅槃略説教誡経

東 隆 眞

An Introductory Analysis of the Manuscript of the Bushi hatsu nehan ryakusetsu Kyōkai kyō
Reportedly Punctuated by Keizan Zenji and Stored at Tōkokuzan Yōkōji

Ryūshin AZUMA

目 次

はじめに

新資料 洞谷山永光寺蔵 伝瑩山禪師訓点 仏垂般涅槃略説教誡経 影印・翻字（読み下し）

新資料 洞谷山永光寺蔵 伝瑩山禪師訓点 仏垂般涅槃略説教誡経の形態

本経（木版本）について

本経の表記、訓点などに関わる特長

嬉良と徳隠について

洞谷山永光寺

『仏垂般涅槃略説教誡経』の概要

a、経題

b、本経の主旨

c、訳経僧 鳩摩羅什三蔵

d、本経の成立および經典成立史上の位置

e、『仏垂般涅槃略説教誡経』の伝訳

(1) サンスクリット語ないしチベット語の原典

(2) 漢訳本

(3) 英訳本

(4) 日本語訳本（訓読本）

『能為洞谷山永光寺行事次序』の『涅槃会』と『涅槃講式』の紹介

a、『涅槃会』の疏

b、『涅槃講式』

主要参考文献

はじめに

石川県羽咋市の洞谷山永光寺（曹洞宗）は、曹洞宗太祖瑩山紹瑾禪師（一二六八？～一三三五）の開創した由緒深い古刹である。

瑩山禪師研究に四十有余年を費やしてきた私は、永光寺に瑩山禪師ゆかりの『仏垂般涅槃略説教誡經』^{ぶつしはんねはんりやくせつぎょうかいぎょう}（以下、『遺教經』と略称する）が伝来していることを、再三にわたる永光寺調査の折、当時の住職であった日下部晋巖老師や三輪悦禪老師からうかがっていたが、実見する機縁に恵まれなかった。平成九年の春、当時の永光寺監寺役であった屋敷智乗老師の御理解と佐藤末春氏の全紙撮影、現状調査の御協力をえて、その概要を知りえることが出来た。さらに、平成一〇年一〇月一〇日から同年一月八日まで、石川県立歴史博物館（石川県金沢市）は、秋季特別展「永光寺の名宝」展を開催したが、一〇月一日、私は同館の依頼をうけて、同館の学習ホールで「永光寺と瑩山禪師」と題する記念講演を行った。補助椅子を出すほどの盛況ぶり、昭和六二年開館以来二度目の記録ということであった。このとき、中田修館長の御案内をうけて、伽藍修復中の永光寺から同館が一時保管を委託されている瑩山禪師ゆかりの『遺教經』を直接に手にとって実見し、確認したのであった。平成一一年一月一日、永光寺塔主中野松禪老師から五老峯永光寺復興奉賛会の会長を委嘱された私は、同会の役員会を通じてたびたび中野老師に相見する機会があり、『遺教經』の撮影および研究発表に関する御快諾を頂いていたのであった。そこで、平成一二年の夏には、石川県立歴史博物館に出かけて宿志を達成する

計画予定を立てていたが、この夏、慮らずも病魔の冒すところとなり、全てのスケジュールを中止ないし延期する破目に迫りこまれたのであった。しかし、既に研究紀要委員会に本論文発表の意思表示を届け出ている責任もあり、とりあえず、現段階で、伝瑩山禪師訓点の永光寺に伝来する『仏垂般涅槃略説教誡經』を、新資料として紹介し、解説することにした。これまで学会等に未発表であり、ほとんどその内容が知られていなかったもので、新資料として公開するゆえんである。

永光寺塔主中野松禪老師をはじめ、同寺副寺川端真美老師、屋敷智成老師、佐藤末春氏に更めて感謝の意を表するものである。

思えば、『遺教經』は、仏教の教主釈尊最後の教えということで、曹洞宗高祖道元禪師の筆写と伝えられるものが、曹洞宗大本山總持寺に秘蔵されている。道元禪師最後の撰述として『正法眼蔵八大人覺』の巻もある。これは、『遺教經』の要旨を述べたものに他ならない。また、教主釈尊の入滅を悼んで涅槃會が今も行われており、涅槃講式も伝えられている。また、『遺教經』は、通夜の經典として今も必ず読誦される。その他、委細は省略するが、日本仏教とくに曹洞宗においては『遺教經』はきわめてかわりの深い經典の一つであると言える。しかしながら、この伝道元禪師筆写『遺教經』もほとんど研究の対象とはされてこなかった。私は、いずれ、この『遺教經』の全貌も明らかにしたいと考えているが、今回はとりあえず永光寺の伝瑩山禪師訓点『遺教經』の中間報告的紹介をしておくこととする。

新資料

洞谷山永光寺藏
伝瑩山禪師訓点

仏垂般涅槃略説教誡經

影印・翻字
(読み下し)

洞谷山永光禪寺永代之什物

如今寛永八^辛未載仲秋吉日

榎良再興之者也

點者開山大和尚御点也

爲後代修補之者也

洞谷山永光禪寺永代の什物

如今^{いま}寛永八^辛未載仲秋の吉日

榎良 これを再興するものなり

點は 開山大和尚の御点なり

後代の爲に これを修補するものなり

佛般涅槃略說教誡經

姚秦三藏法師鳩摩羅什譯

釋迦牟尼佛初轉法輪度阿若憍陳如、最後
說法度須跋陀羅、度者皆已度訖於娑
羅雙樹間將入涅槃是時中夜寂然無聲、
諸弟子略說法要、

汝等比丘我滅後當尊重珍敬波羅提木叉
又如闇遇明貧人得寶當知此則是汝大師

佛、般涅槃を垂して教誡を略説する經

姚秦の三藏法師鳩摩羅什 譯す

釋迦牟尼佛、初メニ法輪ヲ轉シテ阿若憍陳如ヲ度シ、最後

法ヲ説テ須跋陀羅ヲ度シ玉フ、度ス應キ所ノ者ノハ皆ナ已ニ度シ訖リ娑

羅雙樹ノ間ヲ將ニ涅槃ニ入玉ントス是ノ時キ中夜寂然トノ聲ヘ無シ諸ノ弟子、
為メニ略シテ法要ヲ説フ

汝等^チ比丘我^カ滅後^ニ於^{マサ}當ニ波羅提木叉ヲ

尊重珍敬スベシ闇ニハ明ニ遇ヒ貧人ハ寶ヲ得ルカ如シ當ニ

我任世無異此也持淨戒者不得販賣質
易田宅畜養人民奴婢畜生一切種殖
及諸財寶皆當遠離如避火坑不得斬伐草
木鑿土掘地合和湯藥占相吉凶仰觀星宿
推步盈虛歷數筭計皆所不應節身時食清
淨自活不得參豫世事通致使命咒術仙藥
結好貴人親厚媒娼皆不應作當自端心正

知ルベシ此レハ則チ是レ汝ガ大師

若シ我レ世ニ住ストモ異ナルコト無クシ此也リ淨戒ヲ持ツ者ハ販賣シ質

易シ田宅ヲ安置チシ人民奴婢畜生ヲ畜養シテ一切種殖スルヲ得ザレ及ヒ諸ノ財寶

皆ナ當ニ遠離シテ火坑ヲ避ルガ如クベシ草

木ヲ斬伐シ墾土ヲ掘地シ湯藥ヲ合ハ吉凶ヲ占相シ星宿ヲ

仰ウ觀シ盈虛ヲ推步シテ歷數筭計スルヲ得ザレ皆ナ應セザル所ナリ節身時食シテ

清

淨自活ナルヘシ世事ニ參豫スルヲ得ザレ通致使命シ咒術仙藥シ

貴人ニ結好シ親厚媒娼マンスルヲミナ皆作ス應ヘカラス

結好貴人親厚嫌懼皆不應作當自端心正
念求度不得菴藏癡顯異惑衆於四供養
思量知足趣得供事不應蓄積此則略說持
戒之相戒是正順解脫之本故名波羅提木
叉依此戒得生諸禪定及滅苦智慧是故
比丘當持淨戒勿令毀缺若人能持淨戒是
則能有善法若無淨戒諸善功德皆不得生
是以當知戒爲第一安穩功德之所住處

當自端心正

念ニ度ヲ求ムベシ瑕疵ヲ苞蔵シ異ヲ顯ハシ衆ヲ惑フヲ得(母)レ四供養ニ
於テ量ヲ知リ足(ル)ヲ知テ供事ヲ趣得シテ蓄積スベカラズ此則略(シ)テ持
戒ノ相ヲ說ク戒ハ是レ正順解脫ノ本ナルガ故ニ波羅提木
叉ト名ク此ノ戒ニ因ニ依テ諸ノ禪定及ビ滅苦ノ智慧ヲ生ズルヲ得是ノ故ニ
比丘當淨戒ヲ持テ毀缺セシムルヲナカルベシト若シ人能ク淨戒ヲ持テバ是レ
則チ能ク善法有リ若シ淨戒無レバ諸善功德皆生スルヲ
得ズ是以當ニ知ルベシ第一安穩ノ功德ノ所住處タルヲ

汝等比丘已能住戒當制五根勿令放逸入於五欲譬如牧牛之人執杖視之不令縱逸犯人苗稼若縱五根非唯五欲將無崖畔不

可制也亦如惡馬不以轡制將當牽入墜於坑塹如被賊害苦止一世五根賊禍殃及累世為害甚重不可不慎是故智者制而不隨持之如賊不令縱逸假令縱之皆亦不久見其磨滅此五根者心為其主是故汝等當好

汝等比丘已能住戒當制五根勿令放逸入於五欲
牧牛ノ人ノ杖ヲ執テ之ヲ視テ縱逸シテ
人ノ苗稼ヲ犯シメザルガ如シ若シ五根ヲ縱スレバ唯五欲ノミニ非ズ將崖畔
無クテ制スベカラズ亦惡馬ノ轡以テ制セザレバ將人ヲ牽テ坑塹ニ墮スルガ如シ賊害
セラルガ如シ苦止ダ一世ナリ五根ノ賊禍殃累
世ニ及ンテ害ヲ為ス甚重シ慎ズンバアルベカラズ是故ニ智者ハ制シテ隨ガハズ
之ヲ持ツテ賊ノ如クン縱逸セシメザレ假ヒ之レヲ縱セシムル皆ナク久カラズ其ノ磨滅ヲ
見テ
此ノ五根トイツハ心ヲ其ノ主シト爲ス

其磨滅此五根者心爲其主是故汝等當好
制心心之可畏甚於毒蛇惡獸怨賊大火越
逆未足喻也譬如有入手執蜜器動轉輕躁
但觀於蜜不見深坑譬如狂象無鈎絆得
樹騰躍踴躑難可禁制當急挫之無令放逸
若此心者良人善事制之一處無事不辦是
故比丘當勤精進折伏汝心
汝等比丘受諸飲食當如服藥於好按惡勿
生增減趣得本身以除飢渴如蜂採華但取

是ノ故ヘニ汝等當ニ好

心ヲ制イヌベシ心ノ畏可キハ毒蛇惡獸ヨリモ甚ク怨賊大火越

逸セルモ未ダタル足スルニ譬ヘバ人有テ手ニ蜜器ヲ執テ動轉輕躁スルニ

但ダ蜜ノ觀ヲ深坑ヲ見ミザルガ如シ譬ヘバ狂象ノ鈎リ無ク猿候ノ樹ヲ得テ

騰躍踴躑ノ禁制スベキナリ當急ニ之レヲ挫ヘテ放逸セシムル

無カルベシ此ノ心ヲ縱者ノハ人ノ善事ヲ喪フ之レヲ一處ニ制スレバ事トノ辦セズト云コトナシ

是ノ

故ニ比丘當ニ勤精進シテ汝ガ心ヲ折伏スベシ

汝等比丘諸ノ飲食ヲ受ルニ當ニ藥ヲ服スルガ如クスベシ好ニ於テモ惡ニ於テモ増減ヲ

生ズル勿レ

趣ニ身ヲ支ヘ得テ

其味不損色香比丘余受人供養趣自除
惱無得多求壞其善心譬如智者棄羣力
所堪多少不令過分以竭其力
汝等比丘晝則勤心脩習善法無令失時初
夜後夜亦勿有廢中夜誦經以自消息無以
睡眠因緣令一生空過無所得也當念無常
之火燒諸世間早求自度勿睡眠也諸煩惱

以テ飢渴ヲ除ク蜂ノ華ヲ採ニ但其ノ味ノミヲ取テ
色香ヲ損セザルガ如シ比丘モ亦クナリ人ノ供養ヲ受ニハ趣ニ自ラ惱ヲ除ケ
多求ノ其ノ善心ヲ懷ル得ル無レ譬ヘバ智者ノ牛力ノ所堪ノ多少ヲ籌量シテ過分
以テ其ノ力ヲ竭シメザルガ如シ
汝等比丘晝ルハ則チ勤心ニ善法ヲ脩習ス失時セシムルヲ無シ初
夜後夜モ亦廢スルヲ有ルヲ勿レ中夜ニ經ヲ誦ン以テ自ラ消息トシ睡眠ノ因緣ヲ以テ
一生空過スルヲ所得無カラシムルヲ無レ當ニ無常ノ
火ノ諸ノ世間ヲ燒クヲ念テ早ク自度ヲ求メテ睡眠スルヲ勿ルベシ諸ノ煩惱ノ

之火燒諸世間早求自度勿睡也
 賊常伺殺又甚於怨家安可睡眠不自驚悟
 煩惱毒蛇睡在汝心譬如黑蛇在汝室睡當
 以持戒之鈎早屏除之睡蛇既出乃可安眠
 不出而眠是無慚人慙恥之服於諸莊嚴最
 為第一慚如鐵鈎能制人非法是故比丘常
 當慙耻勿得暫替若離慚耻則失諸功德有
 愧之人則有善法若無愧者喪諸禽獸無相
 異也
 汝等比丘若有人來節節支解當自攝心無

賊常^{ウカガ}伺^{ツテ}殺^{コロス}又^{コソ}甚^ク於^ニ怨^ヲ家^ヲ安^ニ可^ク睡^ム眠^ス自^ミ驚^キ悟^ルサ^ルル^{ベシ}
 煩^シ惱^ム毒^シ蛇^ム睡^ス在^ニ汝^ニ心^ニ在^ニ譬^ハ如^ク黑^ク蛇^ノ在^ニ汝^ニ室^ニ在^ニ睡^ス
 以^テ持^ク戒^ノ之^ヲ鈎^ヲ早^ク屏^ヘ除^ス之^ヲ睡^ス蛇^ハ既^ニ出^テ乃^チ可^ク安^ニ眠^ス
 不^デ出^ズシテ眠^ルハ是^レ無^シ慚^ノ人^{ナリ}慙^{ザン}耻^チノ服^ハ於^ニ諸^ノ莊^ニ嚴^ニ最^{モトモ}
 為^ス第^一慚^ノ如^ク鐵^ノ鈎^ノ能^ク制^ス人^ノ非^ノ法^ヲ是^レ故^ニ比^ニ丘^ノ常^ニ
 當^ニ慙^{サン}耻^チ勿^レ得^ズ暫^モ替^ハ若^シ離^レ慙^{ザン}耻^チ則^チ失^フ諸^ノ功^ノ德^ヲ失^フ有^リ
 愧^ハ人^ハ則^チ有^リ善^ノ法^{アリ}若^シ無^シ愧^ノ者^ハ諸^ノ禽^ノ獸^ノ無^シ相^ト
 異^{ナル}ナ^リ無^シヤ
 汝^等比^ニ丘^ノ若^シ人^ハ有^リ來^テ節^{セツ}節^{セツ}支^{セツ}解^{セツ}當^ニ自^ラ心^ヲ

恥

今瞋恨亦當謹口勿出惡言若縱恚心則自
妨道失功德利忍之為德持戒苦行所不能
及能行忍者乃可名為有力大人若其不能
歡喜忍受惡罵之毒如飲甘露者不名入道
智惠人也所以者何嗔恚之害則破諸善法
壞好名聞今世後世人不喜見者知瞋心甚
於猛火常當防護勿令得入劫功德賊無過
瞋恚白衣受欲非行道人無法自剎瞋猶可

構ヌテ瞋恨セシムル「無ルヘシ

亦ク當ニ口ヲ護テ惡言ヲ出ス「勿ルヘシ若シ恚心ヲ縱ンバ則チ自ラ

道ヲ妨ケ功德ノ利ヲ失フ之レヲ忍デト爲ス持戒苦行モ及「フ」アタハサル

所ナリ能ク忍行スル者ノハ乃チ名有力ノ大人ト爲ス若シ其レ

惡罵ノ毒ヲ歡喜忍受シテ甘露ヲ飲ムガ如ナル「能ハサル者ハ入道

智惠ノ人ト名ス所以者何嗔恚ノ害ハ則チ諸善法ヲ

破リ「コウ」好名聞壞ル今世後世ノ人トハ「ミル」ヲ喜ズ當ニ知ルベシ瞋心ハ猛火ヨリモ甚ハ

當ニ防護シテ得入セシムル「勿ルベシ」功德劫賊トハ瞋恚ヨリモ過タルハ

無シ白衣受欲ハ行道ノ人ニ非ス法トシテ自ラ制ル「無キハ

於猛火常當防護勿令得入劫功德賊無過
瞋恚白衣受欲非行道入無法自制瞋猶可
怨出家行道無欲之人而懷瞋恚甚不可也
譬如清冷雲中而霹靂起火非所應也
持應器以乞自活自見如是若起憍慢
之增長憍慢尚非世俗自云於道何況
家入道之人爲解脫故自降其心而行乞也
汝等比丘諂曲之心與道相違是故宜應慎

瞋モ猶ヲ恕ベシ出家行道無欲ノ人トノ瞋恚ヲ懷ハ甚不可ナリ
譬バ清冷ノ雲ノ中ニ霹靂有テ火ヲ起ス所應ニ非如シ
汝等比丘當ニ自ラ摩頭シバ飾好ヲ捨テ壞色ノ衣モ着テ應器ヲ執
持シテ乞フ以テ自活シ自是如クナルヲ見テ若シ憍慢ヲ起テ當ニ疾
之レヲ滅スベシ憍慢ヲ增長スルハ尚シ世俗白衣ノ宜所ニ非何況ンヤ出
家入道ノ人トハ解脫ノ爲メノ故ニ自ラ其ノ心ヲ降シテ而モ乞ヲ行センヲヤ
汝等比丘諂曲ノ心ハ道ト相違ス是ノ故ニ宜ク其ノ心ヲ質

汝等比丘諳曲之心與道相違是故宜應質
直其心當知諳曲但為欺誑入道之人則無
是處是故汝等宜應端心以質直為本
汝等比丘當知多欲之人多求利故苦惱亦
多少欲之人無求無欲則無此患直介少欲
尚應脩習何況少欲能生諸功德少欲之人

則無諛曲以求人意多復不為諸根所牽行
少欲者心則坦然無所憂畏觸事有餘常無

不足有少欲者則有涅槃是名少欲
汝等比丘若欲脫諸苦惱當觀知足知足之
法即是富樂安穩之處知足之人雖卧地上

直^{ジキ}ニスヘシ當ニ知ルヘシ諛曲ハ但欺誑^ダ爲リ入道ノ人ハ則チ是ノ處無シ
是故ニ汝等宜ク端心ニシテ質直ヲ以テ爲本トスベシ

汝等比丘當知^ニ多欲ノ人ハ多ク利ヲ求ルガ故ニ苦惱亦タ

多シ少欲ノ人ハ無求無欲ニシテ此ノ患^ウイヘ無シ直ニ余少欲ハ

尚ヲ脩習スヘシ何況^{イカニイハシヤ}少欲ハ能ク諸ノ功德ヲ生ス少欲ノ人ハ

則チ諛曲ク無シ以テ人ノ意ヲ求ム亦タ復諸根^{タメヒカ}爲ニ牽^ヒレ少欲ヲ行スル

者ノハ心口則チ坦然トシテ憂畏スル所^ニ無シ事ニ觸レテ餘リ有リ常ニ不足無シ少欲ノ

猶爲安樂不知足者雖慶天堂亦不稱意不知足者雖富而貪知足之人雖貧而富不知足者常爲五欲所牽爲知足者之所憐愍是名知足

汝等比丘若求寂靜無爲安樂當離憒鬧獨處閑居靜處之人帝釋諸天所共敬重是故當捨已衆他衆空閑獨處思滅苦本若樂衆者則受衆惱譬如大樹衆鳥集之則有枯朽之患世間縛著沒於衆苦譬如老象溺於不

者則湮繫有是少欲名

汝等比丘若諸苦惱脫欲當知足觀知足

法即是富樂安穩處知足人地上

臥雖猶安樂不知足者天堂處雖亦意稱不

知足者富雖而貧知足人貧雖而富不知

足者常爲五欲所牽知足者爲憐愍是知足名

汝等比丘若寂靜無爲安樂求不當憒鬧閑居獨

處靜處

能出是為遠離
汝等比丘若勤精進則事無難者是故汝等
當勤精進譬如少水常流則能穿石若行者
之心數數懈廢譬如鑽火未熱而息雖欲得
火大難可得是為精進
汝等比丘求善知識求善護助無如不妄念

人ハ帝釋ト諸天ト共ニ敬重スル所ナリ是ノ故ニ

當ニ已衆他衆ヲ捨テ、空閑ニ獨リ處メ滅苦ノ本ヲ思ヘシ若シ衆ヲ樂フ

者ノハ則チ衆惱ヲ受ク譬ヘバ大樹ノ衆鳥之レニ集バ枯折ノ患有ルガ如シ世間ノ

縛着ハ衆苦ニ於テ没ヘシ譬ヘバ老象ノ泥ニ溺レテ自ラ出ル

能ハザルガ如シ是ヲ遠離トス

汝等比丘若シ勤テ精進スレハ則チ事トシ難キ「無キ者」ノナリ是ノ故ニ汝等

當ニ勤メ精進スヘシ譬ヘバ少水ノ常ニ流レテ則チ能ク石ヲ穿ツカ如シ若シ行者ノ

心ニ數ニ數ニ懈廢スレバ譬ヘバ火ヲ鑽ニ未ダ熱カラズシテ

之心數數懈廢譬如鑽火未熟而息雖欲得
火火難可得是爲精進
汝等比丘求善知識求善護助無如不妄念
若有不妄念者諸煩惱賊則不能入是故汝
等常當攝念在心若失念者則失諸功德若
念力堅強雖入五欲賊中不爲所害譬如著
鎧入陣則無所畏是名不妄念
汝等比丘若攝心者心則在定心在定故能
和世間生滅法相是故汝等常當精勤脩習
諸定若得定者心則不散譬如惜水之家善

息ヤミナ 火カ得ト欲スト 雖ドモ 火カ得ト難キガ 如是レバ 精進トス
汝等比丘善知識求善護助求不妄念ニ
如ハ無シ若不妄念有者ノ諸煩惱賊則入ル能ハ是故汝
等常當ニ念攝ノ心ニ在ク若失念者ノ則諸功德失フ若
念力堅強ゴ 五欲賊中ニ入ルト雖ドモ爲ニ害セラズ譬バ鎧ヨロヒ着キ
陣ニ入ル無ル所ノ無キ如シ是不妄念ト名ク
汝等比丘若心攝者ノ心則定ニ在リ心ロ

治堤塘行者亦余爲智慧水故善修禪定令
 不漏失是名爲定
 汝等比丘若有智慧則無貪著者常自省察
 令有失是則於我法中能得解脫若不尔者
 既非道人又非白衣無所名也實智慧者則
 是度老病死海堅牢船也亦是無明黑闇大

定ニ在ルカ故ニ能ク

世間ノ生滅ノ法相知ル是ノ故ニ汝等常ニ當ニ精勤ノ諸定ヲ脩習スヘシ若シ定ヲ得
 者ノハ心則チ散ラセズ譬ハ惜水ノ家ノ善ク

堤塘ヲ治スルガ如シ行者モ亦余ナリ智慧ノ水ノ爲メノ故ニ善ク禪定ヲ修メ

漏失セシメザラシメヨ是ヲ名ケテ定ト爲ス

汝等比丘若シ智慧有レバ則チ貪著無シ常ニ自ラ省察メ

失有ラシメサレ是レ則チ我ガ法ノ中ニ於テ能ク解脫ヲ得ルナリ若シ余サル者ノハ

既ニ道人ニ非ラス又白衣ニ非ラス名クル所口無キナリ實智慧ノ者ノハ則チ

老病死海ヲ度堅

是度老病死海堅牢船也亦是無明黑闇大
 明燈也一切病者之良藥也伐煩惱樹之利
 斧也是故汝等當以聞思脩惠而自增益若
 人有智惠之照雖無天眼而是明見人也是
 為智慧
 汝等比丘若種種戲論其心則亂難復
 猶未得脫是故汝等當急捨離亂心戲論汝

牢ノ船ナリ亦是無明黑闇ノ大
 明燈ナリ一切ノ病者ノ良藥煩惱ノ樹ヲ伐ル利
 斧ナリ是ノ故ニ汝等當ニ聞思脩ノ惠ヲ以テ自ラ增益スヘシ若
 人ト智惠ノ照有レハ無天眼^{ゲン}ナリト雖モ而是明見ノ人ナリ是^レヲ
 智慧ト爲ス
 汝等比丘若種種ノ戲論ハ其ノ心^{ココロ}則チ亂ル復タ出家スト
 雖モ猶未^モ得脱^セ是ノ故ニ汝等當ニ急ニ亂心戲論ヲ捨離スヘシ汝^チ
 若シ寂滅ノ樂ヲバ得^{ント}欲^{オモフ}バ唯^タ當ニ速ニ戲論ノ患ヘヲ滅スヘシ是不戲論ト名^ク

猶未得脫是故汝等當急捨離亂心戲論汝
若欲得寂滅樂者唯當速滅戲論之患是名
不戲論

汝等比丘於諸功德常當一心捨諸放逸如
離惡賊大悲世尊所欲利益皆已究竟汝等
但當勤而行之若於山間若空澤中若石樹
下閑處靜室念阿毘法勿令忘失常當自勉

精進脩之無為空死後致有悔我如良醫知
病證藥服與不服非醫咎也又如善導示人
善道聞之不行非導過也

汝等比丘若於苦等四諦有所疑者可疾問
之無得懷疑不求安也今時世尊如是三唱
人無問者所以者何衆無疑故時阿菟樓陀
觀衆衆心而自佛言世尊月可令契日可令

汝等比丘諸功德於常當一心諸放逸ヲ
捨スツルコト 怨賊離ル、ガ如クスベシト 大悲世尊ノ利益 セント 欲スル 所ロハ皆ナ
スベシト 已

究竟シヌ汝等

但ニ當ニ勤メテ之ヲ行スベシ山ノ間クニ於テ若シハ空澤ノ中カ若シハ樹

下閑處ノ靜室ニ在テモ所受ノ法ヲ念テ忘失セシムル勿レ常ニ當ニ自ラ勉

精進ノ之レヲ脩スベシ無為空死後チニ悔有「致」我レハ良醫ノ病ヒラ知テ

藥ヲ服スルト服セザルト醫ノ咎ニ非ズ又善導ノ人ノ

善道ヲ示スガ如シ之ヲ聞テ行ザルハ導ノ過ニ非説クカト如シ

汝等比丘若シ苦等ノ四諦ニ於テ疑所ロニ者ノハ疾之レヲ問テハ

汝等比丘若於苦等四諦有所疑者可疾問
之無得懷疑不求受也今時世尊如是三唱
人無問者所以者何衆無疑故時阿菟樓陀
觀察衆心而自佛言世尊月可令契日可令
涼佛說四諦不可令異佛說苦諦實苦不可
令樂集真是因更無異因苦若滅者即是因
滅因滅故果滅滅苦之道實是真道更無餘
道世尊是諸比丘於四諦中受定無疑於此
衆中若有所住未辦者見佛滅度當有悲感
若有初入法者聞佛所說法即皆得度歸依

可疑ヒラ懷イテ求決メザル得ル無シ余ノ時キ世尊是ノ如ク三ヒ唱ヘ玉フ
人間トヒ奉ルモノ者無シ所以者何衆疑ヒモ故ナリ時ニ阿菟樓陀
衆ノ心ヲ觀察シテ而モ佛ケニ白言世尊月キハ熱令可ク日ハ
涼令可佛說四諦ハ異令ベカラス佛說苦諦ハ實ニ苦ヲ樂ナラシム
集ハ真ニ是レ因更ラニ異因無シ苦若シ滅セバ即チ是レ因
滅セン因滅スルガユヘニ果滅ス滅苦ノ道ハ實トニ是真ノ道ナリ更ニ餘
道無シ世尊是ノ諸ノ比丘四諦ノ中ニ於テ決定ノ疑ヒ無シ此ノ

若有初入法者聞佛所說法即皆得度辭如
夜見電光即得見道若有所作已辦已度若
海者但作是念世尊滅度一何疾哉阿菟樓
陀雖說是語衆中皆悉達四聖諦義世尊
欲令此諸大衆皆得堅固以大悲心復爲衆
說汝等比丘勿懷悲惱若我住世一劫會亦
當滅會而不離終不可得自利利人法皆具
足若我久住更無所益應可度者若天上人
間皆悉已度其未度者皆名已作得度因緣

衆ノ中ニ於テ若シ所作未辦ノ者有ラバ佛ノ滅度ヲ見タマツリ當ニ悲感
有ルベシ若シ初入法ノ者ノ佛ノ説ク所ノ法ヲ聞テ即チ皆得度シタマヘバ
夜電光ヲ見テ即チ道ヲ見テ得ガ如シ若シ所作已辦ノ已ニ苦海ノ度者有ラバ但
是ノ念ヲ作セ世尊ノ滅度一何ソハ疾哉阿菟樓陀
陀是ノ語ヲ説テ衆中皆ナ四聖諦ノ義ヲ了達スト雖モ世尊此ノ諸ノ大衆ヲシテ皆ナ
堅固ナルヲ得ント欲シテ大悲心ヲ以テ復タ衆ノ爲メニ
説キ玉フ汝等比丘悲惱ヲ懷ク勿レ若シ我レ住世一劫ストモ會テハ亦タ當ニ滅
會フテ離レサルヲハツイ終ニ得ベカラズ自利利人ノ法皆ナ具
足シヌ若シ我レ

聞皆悉已度其未度者皆已作得度因緣
自今以後我諸弟子展轉行之則是如來法
身常在而不滅也是故當知世皆無常會必
有離勿懷憂懼世相如是當勤精進早求解
脫以智慧明滅諸煩惱世實危脆無牢強者
我今得滅如除惡病此是應捨罪惡之物假

久住^{ストモ}更^ニ所蓋無^{ケンヤ}度^{スベキ}トコロノ者ノハ若シハ天上人

聞皆悉^ナ悉^ク已^ニ度^{シタ}其ノ未度ノ者ハ亦タ已^ニ得度ノ因緣ヲ

作^{ナサ}自今以後我諸ノ弟子展轉^{ジコン}之^ヲ行^{セバ}則是^ハ如來ノ法

身常在^ニ而^モ不滅^{ナリ}是^ノ故當^ニ知^{ルベシ}世^ヨ皆^ハ無常^{ナリ}會^ハ必^ス

離^ル有^リ憂惱^ヲ懷^クコト勿^レ世相^ヲ是^ノ如^シ當^ニ勤^メ精進^ノ早^ク解

脫^ヲ求^メテ以^テ智慧^ノ明^ヲ以^テ諸^ノ癡闇^ヲ滅^{スヘシ}世^ヨ實^ニ危脆^{キゼイ}牢強^{コウ}無^キ者^ノナリ

我^レ今^マ滅^{メツ}得^{ラウ}惡病^ヲ除^クカ如此^{レハ}是^レ捨^{ツベキ}應^ル罪惡^ノ物^{モノ}ナリ假^{カリ}ニ

佛垂般涅槃略說教誡經

名爲身沒在老病死大海何有智者得除
滅之如殺怨賊而不歡喜
汝等比丘常當一心勤求出道一切世間動
不動法皆是敗壞不安之相汝等且止勿得
復語時將欲過我欲滅度是我最後之所教
誨

佛、般涅槃を垂して教誡を略説する經

名^ナケ^テ身^ミ爲^ミ老^ロ病^ビ生^シ死^シノ大海^{イカ}ニ没^{セリ}在^リ何^ナナル智^チ者^{シャ}有^アテ^カ之^ノヲ除^ル
滅^メスル^{コトヲ}得^{ヘテ}怨^{オン}賊^{ソク}ヲ殺^{コロ}スカ^ニ如^ニクシテ而^モ歡^{カン}喜^キセザランヤ
汝等^ニ比^シ丘^コ常^ニ當^ニ一^ニ心^ニ出^{シュツ}道^{ダウ}ヲ勤^{キン}求^{スベシ}ス一切^{イッ}世^セ間^{カン}ノ動^{ドウ}
不^フ動^{ドウ}ノ法^{ホウ}皆^{ミナ}是^レ敗^{クハ}壞^ク不^フ安^{アン}ノ相^{サウ}ナリ汝等^ニ且^ヤ止^ミ勿^ナ得^ヘテ復^{フタ}語^ゴヲ得^ヘテ勿^ナレ時^{トキ}將^{マサ}ニ過^{スギ}サント欲^{ホツ}ス我^ガレ滅^メ度^トニ欲^{ホツ}ス是^レ我^ガ最後^{サイゴ}ノ教^{ケツ}
誨^{ホシ}スル所^{トコロ}ナリ

洞谷山永光禪寺室中之住寶

閑山大和尚御執持之品

來_{甲午}歲四百五十回大忌也

如今亦再興以

鎮護山門

擁護法命

茲時明和九_{壬辰}年桃浪廿八日 德隱謹記

洞谷山永光禪寺室中の住寶_(ママ)にして

開山大和尚御執持の品なり

來_{甲午}歲は四百五十回大忌なり

如今亦再興し以て

山門を鎮護し

法命を擁護す

茲時明和九_{壬辰}年桃浪廿八日 德隱謹んで記す

新資料 洞谷山永光寺藏 佛垂般涅槃略説教誡經の形態
伝瑩山禪師訓点

一、識語

洞谷山永光禪寺永代之什物

如今寛永八^辛未^辛載仲秋吉日

娛良 再興之者也

點者 開山大和尚 御点也

爲後代修補之者也

一、奥書

洞谷山永光禪寺室中之住寶^(マ)

開山大和尚御執持之品

来^甲午^午歲四百五十回大忌也

如今亦再興以

鎮護 山門

擁護 法命

茲時明和九^壬辰^辰年桃浪廿八日 德隱謹記

一、修補 寛永八年(一六三二)

一、保存 かなり汚損している

一、箱 縦 30.1 cm 横 6.8 cm 深さ 6.8 cm

蓋の表面に、仏遺教 洞谷開山御所持品 能州永光寺とある

一、卷数 卷子本一卷

一、料紙 楮紙か

一、寸法 縦 25.5 cm 横 358 cm

7 紙重ね継ぎ

第1紙 37.5 cm

第2紙 46.5 cm

第3紙 46.5 cm

第4紙 47.0 cm

第5紙 47.0 cm

第6紙 45.5 cm

第7紙 47.0 cm

一、仕立 軸先 黒檀、表紙 金欄、見返し 金小石振り

一、表題 なし

一、押界線 天地 21 cm 左右 2 cm

一、本文 天地 17 文字 152 行

一、刊写 木版刷り

本經（木版本）について

本經は木版本である。はじめは折本であつたのであろうが、いまは見られるとおり、卷子本になつてゐる。納富常天博士は、「瑩山手沢本と伝えられる『仏垂般涅槃略説教誡經』一卷」（「永光寺の文化財」）平成12年 永光寺史料調査報告書「平成二二年 石川県羽咋市教育委員会文化財室編集発行」と述べてゐる。「木版」の『遺教經』に一、二点、上、下点、レ点、訓みの仮名などを施したのである。これが識語で久外娛良がいう「御点」の意味である。木版本としては、中国や朝鮮で刊行された一切經（大藏經）、わが国に將來した一切經がある。これら一切經の概要については、たとえば宇井伯壽博士著『佛教經典史』（昭和三十三年 東成出版社刊）によつて知られるから、今は省略する。大正一二年から昭和七年にわたつて『大正新脩大藏經』全百卷が、高楠順次郎、渡辺海旭両氏によつて企画し、完成した。実は、私の受業師・法幢師であつた渡辺頼応老漢（當時は文学士瀧野時之助）は、最初期のころの『大正新脩大藏經』校訂のメンバーで、渡辺海旭氏の指導のもと、芝の増上寺・閼藏亭で作業に従事した。そのころの状況、苦勞を茶のみ話によく聞かされたものである。その『大正新脩大藏經』第一二卷宝積部下涅槃部全には、本經が高麗本を底本とし、最も多くの諸本、宋本、元本、明本、宮内省図書寮本（旧宋本。北宋勅版、蜀版ともいう）と対校したものが収蔵されている。この校訂に瀧野時之助が従事したかしくなかつたについては定かではないが、必ずしも校訂作業は嚴密を極めたものではないようである。一例をあげておくと、本經の終りの部

分に、「汝等比丘常一心勤求出道^離」とある。これは、はじめ「出道^離」と彫つたが、その誤りについて、のちに「出離道」と離の字を加えたのであるが、『大正新脩大藏經』では、この点について、校正の点で一切触れるところがない。触れないのは触れる必要がなかったからなのか、あるいは触れることを忘れてしまったのか。もし忘れてしまったのならば、杜撰のそしりをまぬがれないであらう。

これも脱字修正にかかわる事項であるが、本經に「譬如清冷雲中而霹靂起火非所應也」とあるが「而」の右横に「有テ」字を補つてゐる。これは異本を対比して「有」字を添えたのか、「有」字が欠けていることに気づいて入れたのか、また瑩山禪師か他人かは推察は自由だが特定は不可能である。ちなみに、『大正新脩大藏經』第一二卷の対校によれば、底本の高麗版には「而有」の二字は無く、「而有」字の有るのは、宋本、宮内省本となつてゐる。伝道元禪師の筆写、写經の『遺教經』（大本山總持寺藏）では、「而有」の二字が入つてゐる。

それはそれとして、本經は、いずれの一切經の『遺教經』なのであろうか。これについては、よほど慎重に検討、吟味を加えなければならぬが、現時点での私の結論めいたことを先にしるしておく、要するに決定的なことは今後の課題としたいのである。

というのは、右の『大正新脩大藏經』第一二卷の校訂による限り、本經では訳者について「姚秦三藏法師鳩摩羅什 訳」となつてゐるが、これは宋本、元本、明本、旧宋本の四本にみられるところであり、高麗版では「後秦龜茲国三藏鳩摩羅什 奉詔訳」となつてゐることになつてゐる。したがつて、本經は宋本、旧宋本の可能性が高く、高麗版

ではないことになる。

ところが、本経では「勿懷憂惱世相如是当勤精進早求解脱」とあるが、高麗版でも「世相」となっている。しかし、宮内省本は「世間」となっているところである。

『大正新脩大藏經』第一二巻による限り、この矛盾する現象を克服するにはいろいろの手段があると思われるが、何と言っても各種の一切経を直接に実見して本経と同一のものを探し出すことであろう。その作業を完了していない私としては、現時点で、安易な結論を出すことを避けたのである。

本経の表記、訓点などに関わる特長

直前にも触れたとおり、本経は木版の『遺教經』に、一、二点、上下点、レ点、訓点そのほかを施したものである。全一五二行、各行は原則として一七字であり、段落の個所は、二字、三字、七字、一字、一二字などである。

本経がいかなる木版本であるかは未決であるが、表記、訓点などに関わる特長的現象の一斑に限って、以下に指摘しておきたい。

異字、異体としては、

最(最)、跋(跋)、陀(陀)、玠(珍)、殖(殖)、坑(坑)、
竿(算)、解(解)、藏(藏)、卒(本)、定(定)、慧(慧)、
能(能)、穩(穩)、霧(處)、此(此)、害(害)、等(等)、
惠(惠)、惕(慢)、器(器)、冬(亦)、失(失)、乞(乞)、
直(直)、脩(修)、貧(貧)、契(熱)、法(法)、惱(惱)、

熬(殺)、怨(怨)など。

漢字の右側に添えられた訓みの仮名としては、

縦ホイシマニスレバ、趣スミヤカニ、者イッハ、黒コク、霧コトハリ、數シバ、憤クワイニ、度ワタル、
無為イツクゾムナシク、空スミヤカニ、急スミヤカニ、在ヨク、心ムネニ、一イツナン、何ソノハヤキヤ、疾ツイニ、終ホツス、欲スギナント、過ホツス、過スゴサシトなど。

これら訓みの仮名は、寛永八年(一六三二)仲秋の吉日、永光寺住職の娛良の識語によれば、「点者 開山大和尚 御点也」とあるから、同寺開山瑩山紹瑾禪師の添えたものということになる。しかし、この婦良の識語は、にわかには信用されない。というのは、(A)これらの訓点に濁点、半濁点が打つてあること、(B)ここに挙げた以外の訓点にも言えることであるが、単数の人の訓点ではなく複数の人の訓点であると認められる疑念があるからである。

(A)についていえば、大本山總持寺には道元禪師の筆写と伝える『遺教經』の写経が蔵されているが、この訓点には濁点、半濁点が一切付していない。私は同写本が道元禪師の謄写にかかわるものかどうか、ことのほか釈尊を追慕し、「仏祖正伝の法」を主唱する道元禪師に『遺教經』の写経が伝わっていることはまことにふさわしい伝承であるが、そのことと本写経が道元禪師の写経であるかどうかは一応切り離して検討すべきだと考えをもっているが、それにしても本写経は、鎌倉時代までの写経の特徴を濃厚に伝えていることは、この時代のこの種の文献資料を手にした私のささやかな経験からも推定するところである。

(B)についていえば、現にみる本経の訓点は複数の人に手になるところがあるから、もとは瑩山禪師の訓点と仮定しても、その後、別人が筆を加え、書き添えたことを容易に推察させる疑念を生じさせるので

ある。

一例を示せば、「離^{ハナレバ}ニ慚^{ザン}耻^チ」の「ザンチ」、「ハナ」は「レバ」、「ヲ」とは、墨色の濃淡の相違、筆跡の相違が指摘されよう。「不^ル上^{ガシメ}令^{シメ}三^ミ過^{クワ}分^{フン}以^テ竭^{ツク}ニ其^ミ力^{リキ}」のあたりも、複数回にわたって複数人が上点、一、二、三点も振り仮名も書きこんだ様子がかがわれる。このような事例は、ほかにも言いうるであろう。この「複数人」が同一人なのか別人なのか不明なので、ここでは「疑念がある」としておくのである。

なお、訓みの仮名で、二箇所について、私見をさしはさんでおく。

「趣^{スミヤカニ}」であるが、「趣^{スミヤカニ}」は、現行本では、「趣^{スミヤカニ}に身を^ミ支^{ササ}ふる（こと）を得^えて以^{もつ}て飢^き渴^{かつ}を除^{のぞ}け」（国訳大蔵経本、国訳一切経本）とあつて、「わずか」と読んでいる。サンスクリット原典ではどうなっているのかうかがうよしもないが、この趣は、「わずか」と読んだ方が、前後の文脈からみて妥当のように思われる。伝道元禪師写経『遺教経』（大本山總持寺蔵）も、このところで「趣^{スミヤカ}」という振り仮名をつけている。しかし、諸橋『大漢和辞典』巻十を見ても、趣には、「はやい」、「すみやか」、「いそぐ」の意味はあるが、「わずか」の意味はしるしてない。この点から見ると、現行本は訓みはまちがっているかも知れないが、意味はまちがっていないし、本経や總持寺本は訓みは正しいかも知れないが、意味はまちがっているといえそうである。本経や總持寺本は意味についての配慮というか吟味が足りないというべきではないか。

「一何^{イトナンソハヤキヤ}疾^{ハヤキヤ}」であるが、總持寺本は「一何^{イトナンソハヤキヤ}疾^{ハヤキヤ}」を「イトスミヤカナリ」と訓んでいる。ここは、前後の文脈からして、「一^{ヒト}へに何^{なん}ぞ疾^{すみ}やかなる哉^や」（国訳大蔵経本、山上曹源訳。国訳一切経本、深浦正文訳）と訓む

のが常識的で分りやすいであろう。「イトスミヤカナリ」がまちがいだとは言わないが、どちらかといえば、「一^{ヒト}へに何^{なん}ぞ疾^{すみ}やかなる哉^や」の方がより適切だと思われる。本経には、「イトナンソハヤキヤ」と訓点が付してある。やはり、この方が「イトスミヤカナリ」よりはよいであろう。

次に、振り仮名、送り仮名は、見られるとおり、ことごとく片仮名でしるしてある。

最後に、語釈の例を指摘しておく。

本経は「汝等比丘当自摩頭已捨飾好着」うんぬんの上部に「摩頭トハ頭ソル」の語が毛筆で書きこんである。

なお、他にも二、三あるが、とりあえず右にとどめておく。

婁良と徳隠について

婁良の名は識語に、徳隠の名は奥書に、それぞれ出ている。両者とも自筆で、本経は洞谷山永光寺「開山大和尚」（瑩山禪師を指す）の「点（御点）」であること（婁良）、また「開山大和尚御執持之品」であること（徳隠）を明記している。

さて、婁良も徳隠もその業歴は明らかではない。徳隠の名は『曹洞宗全書 大系譜』(一)(二)に全く見出せない。徳隠は永光寺第四九四世徳隠恵運のことで、瑩山禪師四百五十回のころの永光寺住職である。永光寺蔵『瑩山紹瑾画像 絹本墨画著色 縦(二二・八センチ、横五七・四センチ)は、ときの住職である徳隠が安永三年(一七七四)に新調したものであることが知られる(『永光寺史料調査報告書』二〇〇〇年 石

川県羽咋市教育委員会文化財室編集発行)。また、前後するが、永光寺伝燈院の靈牌(天地四六・五センチ、横一七五センチ、厚一センチ。木製。黒漆塗。額装は、永光寺二世明峯素哲の頃に作製されたと推定されるものを、明和九年(一七七二)、現住の徳隠が修補したものであるという銘がある。この木牌は、すでに拙著『瑩山禪師の研究』(昭和四九年春秋社刊)で紹介したが、近年、小西洋子氏は、「永光寺伝燈院の靈牌について」(石川県立歴史博物館「紀要」12 一九九九年刊行)と題して、その実態、内容をかなり詳しく紹介した好論文がある。永光寺内を深索すれば、徳隠に係するものが更に多く発見されるかも知れない。

娛良の名は、『曹洞宗全書 大系譜』(一)、『加賀大乘寺史』に名が出ている。娛良はつぶさには久外呑良と言ひ、永光寺四七六世、広昌開山とある。また超山闇越(大乘21、放生4、蓮泉、太平各開山)の弟子とある。『加賀大乘寺史』をひもとくと、

「第二十一世 超山闇越和尚

州山昌の法嗣、越中の人なり。撰津の太平江蓮泉寺開山。寛文十二年

壬子五月三日寂寿九十二歳(九十三と云あり)。法嗣四員

・福州光智 久外呑良 丹岩 融 通外義徹(大聖寺、実性寺開山)」

とあり、たしかに「久外呑良」の名が見える。一七世紀の人物である。

さきにも紹介したが、最近発行された『永光寺の名宝』(平成一〇年

石川県立歴史博物館発行)や『永光寺史料調査報告書』(平成一二年 石

川県羽咋市教育委員会文化財室発行)、とくに後書にはより明瞭である

が、久外娛(呑)良の名を多く見出すことが出来る。寛永一七年(一

六四〇)、瑩山禪師の二五糸袈裟下包覆紗(絹地。八一・五×八五・〇)

一枚を新調したときの銘をはじめとして、およそ二〇箇所あまりに、その名をとどめている。関心の向きは、同書をご覧いただくことをおすすめしておく。

さて、いま「久外呑(娛)良」といえば、永光寺に伝来する「鎮金宝書」『中興雜記』なる文書一冊があつて、これが呑良の編集、自筆になるのである。この文書については他日あらためて紹介することもあろうが、いま、一、二、三の点をとりあげて呑良の立場や考え方をうかがつておくことにしたい。

娛良はいふ。

「勅宣 能州總持寺住持職位事 右緬 伝 鷲嶺之正脉 直 匡 曹洞之勝躡 祖位 齊 瑞竜 宗綱 振 天下 己 恢弘 祖道 盍 拳 揚 弘法 一 聊 榮 少 林 之 芬 芳 一 花 五 葉 鎮 皇 圖 之 長 久 矣 萬 春 千 秋 者 天 氣 如 斯 斯 之 悉 然 矣」

正平九年 三月二日 奉 三品大納言行房判」の院宣を掲げ、次の

如く激越な言辞によつて、總持寺叡山派に対し、右を否定している。

正平九年は「龜山即位 丁 八十五年」となし、「總持於 叡山派

為 大虚言妄語 非 龜山院宣 惣持 龜山ノ綸旨ト云、 龜山ノ御宇、自 茲

歳 七十年ノ 己前也 叡山自 入院 丁 三十一年 瑩山和尚 迂化 丁 三

十年 自 正平 丁 三、 十三年 叡山遷化 非 院宣、 三十年 正平 九年也 綸

旨也」と。

更にこれに呼応するかのよう、次行には次のような行間の添記も見える。すなわち能州諸嶽山總持禪寺にあてた綸旨は、「実ハ洞谷山永光寺ナリ峨山派ノ者改之總持ノ綸旨トナス也中古總持下盛ナル時ヨリ

永光衰ニマカセ皆掠メナス者也ト古ノ夏ヨリ知ル人伝之」と同巧異曲の文章であるが、おそらく後人の記録であろう。

また、別の個所で、浄住寺、放生寺、總持寺、光孝寺、光禪寺や諸岳山總持五院の普藏院、妙高庵、洞川庵、伝法庵、如意庵などの諸由緒寺院名を挙げ、「此外天下曹洞之諸寺庵悉皆永光末之也」として、曹洞宗諸寺庵の本寺であることを強調する。

更に、本書は、「本寺開闢之次第」として「永平開闢 仁王九十七代後嵯峨院ノ御宇 建元二年^{甲辰} 七月七日 越前ノ太守波多野雲州大夫義重之建立也」とあるところを見ると、永光寺の本寺を永平寺としているらしいことが推察される。

これによってみれば、嬖良は、住職をしていた寛永一〇年代の永光寺で庫裡を修復し、方丈を新築し、輪住制を独住制に改めるなど「中興」と自称しているほどであるが、總持寺をはじめ、大乘寺、浄住寺と対立し、永光寺の正統性、優位性を強調し、しかも永平寺の末寺と位置づけて、ひとり万丈の気炎を吐いていたことがわかる。裏をかえせば、永光寺の正統性、優位性が他派より、あるいは自派からさえもおびやかされていた、ないし無視されていたというような当時の宗門事情があつたのかも知れない。

卷末に「昔寛永十九年^{壬午}（一六四二）六月廿三日書之 当山中興久外嬖良（花埤）」とあり、また「明治廿一年（一八八八・東注）ニ至リテ寛永一九年ニ訴リテ二百四十七年ヲ経ル 五百十世白巖記」とある。それぞれ嬖良、白巖（白巖良魏。永光寺五〇九世ともいう）の自筆になるものであろう。

洞谷山永光寺

洞谷山永光寺は、さきにも触れたとおり、石川県羽咋市酒井町にある曹洞宗の古刹で、曹洞宗太祖瑩山禪師の開山地である。

洞谷山永光寺の山号、寺号は、瑩山禪師の命名である。中国曹洞宗の祖洞山良价の家風を慕って洞谷山となえ、おなじく中国曹洞系の祖師大陽警玄を慕って永光寺と号した。「洞谷山大榎峯永光妙莊嚴院」とも名づけているが、「大榎峯」とは総門脇にあつた大榎から採り、妙莊嚴院とは方丈にあてられた別稱である。

永光寺の「七堂伽藍」の形式は、永光寺式伽藍配置と称えられ、永平寺に準拠し、大乘寺の様式を省力化したもので、五老峯伝燈院を中心につくられており、わが国曹洞宗における典型的伽藍のひとつに挙げられている。総門から山門、法堂（最勝殿）が一直線に並び、法堂の向って右側に庫院（香積院・書院・方丈）浴室（明水因）、左側に僧堂、東司そのほかに伝光閣、鐘樓、衆寮などが建てられ、これら諸堂は回廊で一つの円のかたち（一円相という）に結ばれている。法堂の直後が五老峯伝燈院、そばに白山水の水屋、五老峯伝燈院の後部に五老峯（このあたり一帯を天童山とよんでいる）がある。

同寺には、多くの国指定重文（六 points）、県指定文化財（二五 points）、市指定文化財（二四 points）その他があり、世に「永光寺文書」（佐藤進一著『古文書学入門』一九七一年 法政大学出版局発行）とよび、近年は「北陸の正倉院」とよぶ向きもある。

永光寺の概要については、昨平成十一年、永光寺から「洞谷山永光

寺」と題する小冊子のガイドブックが出たが、請われて、私は次のように記しておいた。必ずしも満足出来るものではないが、とりあえず、これを充てて、洞谷山永光寺の概要の紹介に代えることとする。

「洞谷山永光寺（とうこくさんようこうじ）は、わが国曹洞宗（そうどうしゅう）の高祖道元禪師（一二〇〇—一二五三）と並んで太祖として尊崇される瑩山禪師（一二六八—一三二五）四十五歳のとき、能登国中河（羽咋市）の地頭酒勾頼親の嫡女、平氏女（祖忍尼）から寺地等の寄進を受け、正和二年（一三二三）に創建された曹洞宗の古刹です。

又、伝燈院の背後の山上には、元亨三年（一三三三）に築造された霊場「五老峯」があります。

五老峯には、高祖（天童如浄）の語録、曾祖（永平道元）の靈骨、師翁（孤雲懷奘）の血経、先師（徹通義介）の嗣書、自身（瑩山紹瑾）の嗣書が安置されています。

更に、瑩山禪師は、「洞谷山尽未来際置文」を草し、「出家、諸門弟等、一味同心にして当山をもつて一大事となし、ひとえに五老峯を崇敬せよ」と教えられました。

永光寺創建の当時は、本寺を中心に五院、二十数坊を擁して繁栄し、特に後醍醐天皇をはじめ南朝、北朝の帰依により勅願寺となり、光厳上皇の勅願による三重の利生塔の建立、また宗門唯一の霊場「五老峯」など、世の崇敬をあつめました。が、応仁二年の大乱（一四六八）の兵火により、伽藍の大部分を焼失、その後、後土御門天皇の発願により再興されましたが、天正七年（一五七九）上杉謙信のため再び全山焼

土と化してしまいました。

現在の伽藍は寛永以後の再興で往時を偲ぶべくありませんが、その伽藍は永光寺様式として曹洞宗伽藍構成の典型を羽咋市の山峡、その山々に守られるように、ひっそりと現に伝えています。」

宗門における洞谷山永光寺の位置づけについては、かつて大久保道舟博士が「五老峯の創立こそは、実に宗門相承の本源と僧伽帰仰の中心とを具体的に示したものであり、「宗門を磐石の上に据えるため、五老の諸師について最も重要と思われる品々を洞谷の山頂に埋めて、宗門の伝統の永遠性を確立されたその広大な功績は、われわれ法孫として、最も敬仰讃歎しなければならぬ点であると思う」（「瑩山禪師の御鴻業」昭和四九年、『瑩山禪師研究』所収 大本山總持寺刊）と述べているのは、至当である。

『仏垂般涅槃略説教誡経』の概要

a、経題

『仏垂般涅槃略説教誡経』は、仏垂涅槃略説経とか、仏臨涅槃略説経とか、あるいは仏遺教経、遺教経、遺経など、いろいろによばれている。もともとは、サンスクリット語の原典があつたのかも知れないが、今はそれを見ることは出来ない。

『仏垂般涅槃略説教誡経』という経題は、「仏、般涅槃を垂して教誡を略説したまう経」と訓読する。

釈迦牟尼仏すなわち釈尊が涅槃を示して弟子たちに最後の説法をな

されたことが説かれている。いいかえれば、釈尊のご遺言、ご遺教というかたちをとっている。教誡というのは、戒を指す。略説するというのは、奥深い教えの要点を示すということである。

b、本經の主旨

釈迦牟尼仏は、成道されたあと、まず、はじめに、阿若憍陳如を、そして最後の説法で須跋陀羅を教化し、済度すべきものはすべて済度しおわって、娑羅双樹のあいだで、まさに涅槃をお示しになるところからはじまる。

まず、釈迦牟尼仏は、ご自分の滅後において、弟子たちは、波羅提木叉を師として尊重し、珍敬しなければならぬと説く。戒を持つようにすすめる。戒はもろもろの善の功德の生ずるところであり、安穩の功德の住むところであるというのである。

次に五根を制し、五欲をほしきままにしないように説く。次に、つとめて精進するように説く。次に、もろもろの飲食に対して、あたかも薬を服するように受けることを説く。次に、睡眠をむさぼらないように説く。次に、瞋りや恨みを抱かないように説く。次に、憍慢の心を起こさないように説く。次に、諂いの心を起こさないように説く。次に、少欲を説く。次に、知足を説く。次に、静かなところに住むことを説く。次に、精進を説く。次に、不念を説く。次に、禪定を説く。次に、智慧を説く。次に、戯論を捨てることを説く。

このように説きすすめ、説きおわって、四諦について疑念のある者は質問せよと、三たび唱えられたが、誰もことばを発する者はいなか

った。みんなは疑いがなくなったからである。しかし、なお阿菟樓駄という弟子は、釈迦牟尼仏に、釈迦牟尼仏の涅槃に悲感をもっている者がいると、申しあげる。そこで、釈迦牟尼仏は、この期に及んで、弟子たちが悲悩をいだくことがないように説く。釈迦牟尼仏の説いた教えを修行すれば、如来の法身は滅することがない。それゆえ、つねに、一心に、煩惱から出離する道を求めるように説く。もう語ることをやめよ。時は過ぎていく。私は涅槃したい。これが、私の最後の教誨であるとして、結ばれている。

c、訳経僧 鳩摩羅什三蔵

『仏垂般涅槃略説教誡經』を漢訳した鳩摩羅什三蔵くもらしやうさんぞう（サンスクリット語の発音はKumārāśva・二四四―四一三。また三五〇?―四〇九?の説がある）は、いまからおよそ一六〇〇年ばかりさかのぼったころ活躍した訳経僧である。

本經に、「姚秦三蔵法師」とあるが、姚秦とは、中国南北朝時代、後秦の時代の姚興という王ないしその時代をあらわしている。

鳩摩羅什という名前からわかるように、彼は、インド系の父鳩摩羅炎とクチャ（古くは龜茲と記す）の国王の妹の母と太祖姚萇（三三〇―三九三）の長子。姚興（二六六―四一六）は後秦（三八四―四一七）の高祖とよばれる第二代の皇帝。西秦、後涼を征服した仏教信仰の厚い皇帝であつたようで、姚興の庇護により鳩摩羅什三蔵を中心とする後秦仏教は大いに盛えた。しかし、その長子姚泓（三八八―四一七）が姚興の死後、帝位に就いたものの、わずか一年で、後秦は滅亡して

しまった。すなわち西域地方、天山山脈の東部、中国新疆ウイグル自治区ターリム盆地の、クチャで生れたというわけである。

クチャ（庫車）は、玄奘三蔵の『大唐西域記』巻第一に、「屈支国」として掲げられている。

それによると、唐の時代（六一八―九〇七）の、六二七年、玄奘三蔵（六〇二―六六四）が訪れたころのクチャは、東西千余里、南北六百余里、国の大都城は周圍一七、八里という広さで、国王は屈支種族とするしてある。やがて貞観二十一年（六四七）、唐に滅ぼされてしまう。

この国には、仏教寺院は百余か所、僧徒は五〇〇人あまり、小乗教の説一切有部を学習しており、その教義をインドに求め、インド仏教を学んだ。このように、鳩摩羅什は、小乗の盛んな土地において、大乘にも通じ、その名は西域に広く知られるようになった。

建元一八年（三八二）、前秦（三五―三九四）の第三代皇帝、世祖苻堅（三三八―三八五）は、クチャなどチーリム盆地の諸国を攻略し、鳩摩羅什をとりこにした。後秦の姚興は、弘始三年（四〇二）鳩摩羅什を涼州から長安に国師として迎え、一三年間にわたって、西明閣、逍遙園で諸経論を訳出させた。鳩摩羅什は、西域の語にも通じるとともに、長安に来るまえの一四年間ほどは涼州（甘肅省）にも住んでいたから、中国のことばにも通じていたわけである。

鳩摩羅什の訳出した経論は、三五部二九四巻とも七四部三八四巻とも伝えられている。経は、『仏垂般涅槃略説教誡経』のほか、『大品般若経』、『金剛般若経』、『妙法蓮華経』、『梵網経』、『阿弥陀経』、『維摩経』、『坐禅三昧経』、『仏蔵経』、律は『十誦律』、『十誦比丘戒本』、論

は、『大智度論』、『十住毘婆沙論』、『中論』、『百論』、『十二門論』、『成実論』など、今日の私たちにも広く知られている多くの経、律、論を翻訳した。

鳩摩羅什三蔵は、インドから中国へ大乘仏教を紹介し、その後の中国仏教展開の原動力としての役割りを果たしたといわれる。これは、私の推測にすぎないが、鳩摩羅什三蔵の生活した西域は、いわゆる小乗、大乘がならびおこなわれていたのであろうと思われる。中国仏教史上、鳩摩羅什三蔵と、真諦三蔵（四九九―五六九）、玄奘三蔵、不空三蔵（七〇五―七七四）の四人の三蔵法師を、四大訳経僧と称している。

仏教寺院は、石窟寺院であって、いまでもその遺跡が数多く残されており、もっとも知られているのは、キジルの千仏洞である。また、荒れた城の北四〇余里のところに東西の昭怙釐とよぶ二つの仏教寺院がある。ここには長さ一尺八寸、広さ六寸に余る仏足石がある。また大城の西門の外の路の左右には、高さ九〇尺あまりの仏陀の歩行像がある。この歩行像を輦輿にのせて練り歩くのである。それは五年ごとに出家在家を問わず一般大衆のために供養する無遮会とよばれる大法会である。人びとは俗務を中止し、齋戒によってみずからを律し、僧の説法を聴聞して、修養し、信仰生活を過ごす。また、阿奢理貳というところにも伽藍があり、仏像も安置され、僧徒も修行に怠りなく、人びとの供養を受けているという。

鳩摩羅什と玄奘とは、すでに二〇〇年以上のへだたりがあるが、右によって、なにほどこ玄奘の見聞したクチャの様子がうかがえるとおもう。

鳩摩羅什は、七歳で出家し、九歳のとき、母につれられて北インドの罽賓（カシミールまたはガンダーラ地方）に移り、槃頭達多という仏僧に師事して、阿含の經典を学んだ。カシミールは、『大唐西域記』卷三に「迦湿弥羅国」とあり、ガンダーラは、同記卷三に「健駄邏国」とある。

一二歳、罽賓から疏勒に移り、ここで『阿毘曇』『増一阿含經』などを学び、クチャに帰り、四吠陀、五明、陰陽などの諸学を学んだ。やがて、須利那蘇摩に『中論』『百論』、仏陀耶舎に『十誦律』を学ぶ。また、彼は、法華經信仰の盛んなわが日本では、とくに天台宗や日蓮宗の人びとによって尊敬を集めている。彼の門下は三〇〇〇人というが、なかでも僧肇、僧叡、道生、道融は四哲とよばれている。三蔵は、あまりにも拔群の天才ぶりを發揮したので、姚興王は、美女一〇人と同居させ、後継の誕生と子孫の永続をはかったというほどである。また、その經典翻訳に誤謬がなければ、その証しとして死後、舌は焦爛しないと遺言した。実際、遺骸のなかで舌の部分だけがそのまま残ったと伝記はしるす。鳩摩羅什三蔵は、中国人に容易に理解出来るようにサンスクリット語原典を必ずしも字句にとらわれず訳した。そして、それは見事に成功した。

d、本經の成立および經典成立史上の位置

『仏垂般涅槃略說教誡經』の成立事情については、はっきりしたことはわかっていない。

サンスクリット語、チベット語訳の原典もなく、鳩摩羅什三蔵の漢

訳一本しかないことと、その教説がアシヴァゴーシャすなわち馬鳴の『仏所行讚』に酷似しているなどの点から見て、あるいは中国で成立したのではないかと、多くの学者が考証している。

『仏所行讚』とは、西暦一、二世のころ登場したインドの仏教詩人僧馬鳴がしるした釈尊の伝記『ブツダチャリタ』の漢訳の名称である。北凉の曇無讖（三八五―四三三）が漢訳した。二八章から成り立っている。サンスクリットテキスト、チベット訳は二八章だが、漢訳はおおよそ第一四章あたりまでしかない。また、必ずしもサンスクリット語、チベット訳と漢訳とが一致しているというわけではないようだ。

また、『仏垂般涅槃略說教誡經』は、『仏所行讚』の「大般涅槃品第二十六」に符合すると指摘されている。

けだし、本經は、釈尊の涅槃および涅槃にあたつての最後の説法がしるされているから、要するに、「涅槃經」關係の經典ということになるわけである。しかし、それは、いわゆる小乗の涅槃經なのか、大乘の涅槃經なのか、あつかいがはっきりしていない。小乗と大乘の中間に位置しているのではないかともいわれている。

釈尊の涅槃に関する經典としては、『大正新脩大藏經』によれば、第一卷阿含部の中に、

| | | | |
|-------|----|----|-----------|
| 仏般泥洹經 | 二卷 | 西晋 | 白法祖訳 |
| 般泥洹經 | 二卷 | 失訳 | |
| 大般涅槃經 | 三卷 | 東晋 | 法顯訳 |
| 遊行經 | 三卷 | 後秦 | 仏陀耶舎共竺仏念訳 |

の四經がある。

第十二卷涅槃部の中に、

| | | | |
|----------------|------|------------|------|
| 大般涅槃經 | 四十卷 | 北凉 | 曇無讖訳 |
| 大般涅槃經 | 三十六卷 | 北宋 | 慧嚴等 |
| 仏説大般泥洹經 | 六卷 | 東晋法顯共仏跋跋陀訳 | |
| 大般涅槃經後分 | 二卷 | 唐若那跋陀羅訳 | |
| 仏説方等般泥洹經 | 二卷 | 西晋竺法護訳 | |
| 四童子三昧經 | 三卷 | 随闍那崛多訳 | |
| 大悲經 | 五卷 | 高齐那連提耶舎訳 | |
| 等集衆德三昧經 | 三卷 | 西晋竺法護訳 | |
| 集一切福德三昧經 | 三卷 | 姚秦鳩摩羅什訳 | |
| 摩訶摩耶經 | 二卷 | 蕭齐曇景訳 | |
| 菩薩從兜術天降神母胎説広普經 | 七卷 | 姚秦竺仏念訳 | |
| 中陰經 | 二卷 | 姚秦竺仏念訳 | |
| 蓮華面經 | 二卷 | 随那連提耶舎訳 | |
| 大方等無想經 | 六卷 | 北凉曇無讖訳 | |
| 大雲無想經 | 卷第九 | 姚秦竺仏念訳 | |
| 仏垂般涅槃略説教誡經 | 一卷 | 姚秦鳩摩羅什訳 | |
| 仏臨涅槃記法住經 | 一卷 | 唐玄奘訳 | |
| 般泥洹後灌臘經 | 一卷 | 西晋竺法護訳 | |
| 仏滅度後棺斂葬送經 | 一卷 | 失訳 | |
| 迦葉赴仏般涅槃經 | 一卷 | 東晋竺曇無蘭訳 | |
| 仏入涅槃密迹金剛力士哀恋經 | 一卷 | 失訳 | |

仏説当来變經 一卷 西晋竺法護訳

仏説法滅尽經 一卷 失訳

が収められている。

これによってみれば、『大正新脩大藏經』では、本經は、「大般涅槃經」の四十卷本、三十六卷本と並んであつかわれているから、大乘經典ということになるうか。

しかし、近年の仏典解説書のなかには、本經は、インド仏教の原始經典の部におさめてあつて、大乘經典の大乘涅槃經とは區別したあつかいになっている。實際、本經の前半は、波羅提木叉（戒）を嚴守し、五根を制し、精進をすすめ、飲食、睡眠、瞋りや恨み、憍慢、諂いの心、少欲、知足、静処に住むこと、精進、不念、禪定、智慧、戲論を捨てること、四諦などについて説いてあるから、これはどちらかといへば出家の比丘たちの個人的修行生活の指針ということになるかも知れない。その意味では、いわゆる小乗の教説といえないことはない。ところが、後半に、釈尊が釈尊に関することを示しているなかに、「自利利人の法皆具足しぬ」とか、「如来の法身、常に在りて不滅なり」とかの語がある。自利利人や法身不滅の説はいわば大乘の教説の特長をあらわす語のひとつと言つてよいであろう。

思うに、もともと釈尊の教説には、戒や諸徳目を嚴守し、そして自利利人や法身不滅の考えもあつたともうけとめられるがどうであろうか。ことさらに、小乗、大乘と区分してうけとめることもないであろう。そのようなことを印象づけるのが本經であろう。

さて、また、日本などに伝わる大乘仏教の諸經典は、だいたい西歷

紀元の前後、中インドから西インド、南インドにおいて成立したといわれている。これら大乘諸経典を年代順に区分すると、諸説があるが、その代表的な説を、参考までに、紹介しておく。

第一期 西暦二七〇年ごろまで

般若系統

法華系統

華嚴系統

浄土、密教系統

第二期 西暦四〇〇年ごろまで

涅槃系統

勝鬘系統

深密系統

第三期 西暦四〇〇年ごろ以降

楞伽系統

密教系統

したがって、本経は、右で言えば、第二期に成立し漢訳された大乘経典というあつかいをうけているということになる。

e、『仏垂般涅槃略説教誡経』の伝訳

(1) サンسكريット語ないしチベット語の原典

鳩摩羅什三蔵が漢訳にもちいた原典は、現在は、その所在は明らかではない。

(2) 漢訳本

鳩摩羅什三蔵訳。『大正新脩大蔵経』第二二巻宝積部下涅槃部全には、高麗本を底本とし、宋本、元本、明本、宮内省図書寮本(旧宋本)と対校したものが収蔵されている。

高麗本の『仏垂般涅槃略説教誡経』は、巻頭に「後秦龜茲國三蔵鳩摩羅本詔訳」とあり、伝道元禪師書写の『仏垂般涅槃略説教誡経』には「姚秦三蔵法師鳩摩羅什訳」とある。したがって、道元禪師の『仏垂般涅槃略説教誡経』は、高麗本ではないことになるのであろう。高麗では旧宋本を入手して、成宗の一一年(九九一)から顯宗の二年(一一〇一)ごろに、五九二四巻が開板され、つづいて高宗の二三年(一一三六)再彫が開始され、一五年を費やして一五二四部六五五八巻が完成した。韓国の海印寺に収蔵されている。

ちなみに、大蔵経の旧宋本とか宋本とか元本とか明本とかについてあるが、まず、旧宋本とは、開宝四年(九七二)、宋の太祖は、即位して一二年目に、蜀の成都で、大蔵経の開板印行を命じた。五〇四八巻というが、一二年後に完成した。太平興国寺印経院で印行された。北宋勅版とも蜀版ともいう。次に、宋本とは、南宋の高宗のころ、紹興三年(一一三三の前後)浙江省の思溪の円覚禪院で王永従一族が開板した五九一八巻を指す。前後するが、北宋、神宗のころ、元豐三年(一一〇八)から政和二年(一一二二)にかけて出版された福州東禪寺版の五七〇〇余巻(私版)、また、政和二年から四〇年の歳月を費やして完成した福州開元寺版の六一一七巻もある。次に、南宋景炎二年(一一二七)から至元三一年(一二九四)北京の弘法寺で宋本を模刻したものが元本と当宋元本とかかよばれている。しかし、瑩山禪師寂後の開版である

から、瑩山禪師が依用したものではない。明本は、洪武五年（一三七八）六三三二巻が太祖の勅命によって南京で印刷されたが、これも瑩山禪師以後の大蔵經である。

(3) 英訳本

Kaitei Nukariya "The Sutra of Buddha's last instruction"
TOKYO 1897

Eidmann, Philipp Karl "The Sutra of the Teaching's left by the Buddha." Osaka pub. by Yamamoto Koyata 1952

(4) 日本語訳（訓読本）

新版仏遺教經 点附（折本。江戸期？ 大乘寺蔵版）

本多日生訳 仏垂般涅槃略説教誡經（大正六年 大蔵經要義）

山上曹源訳 国訳仏垂般涅槃略説教誡經（大正六年 国訳大蔵經

經部一一 国民文庫刊行会刊）

里見達雄訳 仏垂般涅槃略説教誡經（大正一二年 現代意訳 仏教道德經集

仏教聖典叢書刊行会刊）

仏垂般涅槃略説教誡經（大正一四年 新訳仏教聖典

仏教協會刊）

仏垂般涅槃略説教誡經（昭和四年 昭和意訳 国訳大蔵經 經

典部第六 東方書院刊）

深浦正文訳 仏垂般涅槃略説教誡經（昭和八年 国訳一切經 大東

出版社刊）

遺教經（仏垂般涅槃略説教誡經）（昭和三〇年 仏教聖典
三省堂刊）

曹洞宗総合企画室編 遺教經（昭和四七年三版 曹洞宗宗務庁刊）
曹洞宗教学部編

橋本恵光訓訳 仏遺教經（昭和五七年 瑞応寺刊）

上田祖峯訳 新訳遺教經（一九九三年 三省堂刊）

安藤嘉則訳 遺教經に学ぶ（平成一一年 曹洞宗宗務庁刊）

『能劬洞谷山永光寺行事次序』の

『涅槃会』と『涅槃講式』の紹介

洞谷山永光寺には、『能劬洞谷山永光寺行事次序』が伝来している。これは、世に『瑩山和尚清規』、『瑩山清規』、『洞谷清規』とよばれている。日本の曹洞宗では、道元禪師の『永平清規』とともに修行生活の根本法規として最も重要視されている清規である。

『瑩山和尚清規』は、現在、数種類の異本がある。私は、昭和四九年に『瑩山禪師清規』を著わした。このとき、延宝九年（一六八〇）に『山道白が開版した『瑩山清規』の本文を底本として、大乘寺所蔵写本（永享六年・一四三四）、大乘寺所蔵写本（文明八年・一四七六・愚休写）、永光寺所蔵写本（明応一〇年・一五〇一・巨岳麟広写）、山上嘉久氏所蔵写本（文亀元年・一五〇一）、永光寺所蔵写本（文亀三年・一五〇三・大仲光椿写）ら五写本の本文とを対比して、校異表を付録とした。

右のうち、洞川庵開基無端祖環（總持寺七世・越前祥園寺開山）五世の巨岳麟広が書写して、いま永光寺にある『能劬洞谷山永光寺行事次序』（日中行事、月中行事が記されており年中行事を欠く）のなかに、『涅槃

槃講式」が収録されてある。私の管見する限り、この明応一〇年書写本にのみ、『涅槃講式』が掲載されている。奥書に、応永三〇年（一四二三）正月、瑩山禪師五世の孫大容梵清の文章がのせてあるが、この清規の次第は、「洞谷第一祖瑩山大和尚為後昆所説也」とあるから、この『涅槃講式』も瑩山禪師が実際に修行していたとけとめられる。

瑩山禪師は、『涅槃会』について、「これ永平の旧儀なり」とのべている。また、この『涅槃講式』も、あるいは永平寺の旧儀すなわち道元禪師時代に修行されていた講式なのかも知れない。もともと、いつたい、日本の曹洞宗においては、『涅槃講式』はいつごろからどのように行われてきたものか、道元禪師のころはすでに行われていたのかどうか、瑩山禪師のころはどうであったのか、その実態はどうであったのか、実は、まだまだはっきりしたことは分っていないようである。

そのような点からも、参考資料として、ここに『能勢洞谷山永光寺行其次序』（明応一〇年、巨岳麟広写）の『涅槃会』の疏（原漢文。ただし拙著『瑩山禪師清規』に依る）、『涅槃講式』を転載しておく。ちなみに、私は、先年、東京、神田の古書肆で、明和四年（一七六七）刊の『涅槃講式』、平成一〇年、大本山永平寺拝登の折、平成七年版の『涅槃講式』をそれぞれ入手した。これらとの対比も、いずれその期をえたい。

a、『涅槃会』の疏

まず、法堂で「涅槃仏」（おそらく絵像であろう。ちなみに駒澤学園には、人間国宝故岩野平三郎氏が漉いた越前和紙へ五・四メートル四方十八畳

敷きの一枚和紙重量およそ十一キログラムに、平成八年、藤井正観画伯のえがいた一枚漉きでは日本一の大きさの「平成大涅槃図」が作成され、二月一五日の涅槃会式典にはステージ正面中央に掲げられるのは周知のとおりである）にみんなが七文銭を抛出して供養し、住職が上堂し、説法し、左の疏を読誦する。そして、仏殿で、釈尊に香を供えよと大衆に向ってよびかける。全員は仏殿に至り、山海の珍味と香を供え、『大悲心陀羅尼』を誦する。全員が、正面中央の釈尊に九拝する。鼓を鳴らし、維那が疏を読み、おわって『大仏頂如来蜜因修了義諸菩薩万行首楞嚴經』のなかの神咒を読誦し、遶行し、三拝する。維那は回向文を読んで、散会。疏、回向文は、七百数十年後の今日でも、ほとんど変りはない。『涅槃会』にあたり、なぜに『遺教経』を読まないで『楞嚴咒』を読むことになっているのか、不可解の点である。

二月十五日。涅槃会なり。力に随って供具（お供え物を盛る器）を辨じ（準備する）兼日（前日）衆中（修行僧たちのなか）の大小、山中（永光寺のなか）の諸人、おのおの七文銭を出して、涅槃会を供養したてまつる。机上にこれを点じて、庫下よりこれを勧めて、供具を調う。これ永平の（道元禪師ないし永平寺）の旧儀なり。供具、辨備ののち、上堂（法堂に上って住持が説法する）、例の如し。但し、香を拈（手にとりあげて）じて云く。南閩浮提（須弥山の南方。われわれの住む世界）、大日本国、北陸道、能登の国（石川県）、賀嶋郡、酒井の保（羽咋市酒井町）、洞谷山永光寺開闢（開創）釈迦牟尼仏第五十四世法孫・新戒小比丘某甲（瑩山禪師自身を指す）、この一片の香、鉢中に熱向（ぜつこう）焚く。くべる）し

て、恭しく本師釈迦牟尼如来の爲にしたてまつり、もつて法乳(仏法や師の教えを子を育てる母乳にたとえる)の恩に酬いん者なり。

或いは、祝聖(毎月一日、一五日、天子の聖寿無窮を祈る法要)の香、山呼ののち、また拈香(香を手にとること)して仏に供養す。両様ありといえども、天童浄老禅師(道元禅師の本師。中国天童山景德寺の住職である如浄)以来、ただ仏香を供養するのみ。侍者(住職の側近を補佐する僧)の問訊(合掌し低頭する)これあり。説法罷みて、必ず言う『請う、大衆、仏殿に詣つて、焼香礼拝せよ』と。衆、集れば、主人、焼香し、大衆(修行僧たち)、行列して伝供(みんなでお供えをすること)す。維那(修行僧を指導したり、読経の時、経題や回向文を読む役の僧)、大悲咒(大悲心陀羅尼のこと)を挙ぐ。或いは法鼓(太鼓)を鳴らす。上知事(重役の上位の僧)、供ごとに香を薫じて捧げ伝うれば、主人(住職)また香に薫じて供養せしむ。

供(く)おわりて、両班(法堂、仏殿などで東西にならぶこと)、焼香し問訊して、主人(住職)の左右に立つ。大衆、北面(本尊の方を指す)に九拝(九回の礼拝をささげる)す。拝の間、磬を打つ。拝しおわりて、坐具(九拝などするときの敷物)を収む。主人は坐具を収めずして、長跪(ひざまづく姿勢)して鉢(香炉)を把りて焼香す。維那、出班して疏(表白文)を展ぶ。疏に曰く。

浄法界の身(浄らかな全宇宙をからだとする仏のこと)、もと出沒(あらわれたりかくれたりすること)なし。大悲の願力(衆生を救いたいという仏の誓いと願の力)は、去来(生と死)を示現(あらわすこと)す。仰いで照臨(われわれの迷妄を照らしかがみること)を願ひ、俯して真慈(真

のいつくしみ)を請う。

南閩浮提、大日本国、北陸道、能登の州、酒井の保、洞谷山永光寺開闢・某甲等

今月十五日。詳しく本師釈迦牟尼如来大和尚入般涅槃の辰に遇うて、謹んで、香華・燈燭(お灯し)茶菓珍饈(さかちんしゅう)を辦備して、もつて最後慇懃(ねんごろ。丁寧)の供養を伸ぶ。恭しく現前の一衆を集めて、秘密神咒(大仏頂如来蜜因修了義諸菩薩万行首楞嚴經のなかの神咒)を誦誦(声をあげて経文を暗誦する)す。

集むるところの殊勲(とくにすぐれた功德)は、上慈蔭(いつくしみの御恩)に酬いん者なり。右、伏して以んみれば、常在靈山(靈鷲山)の微月(美わしい月)。釈尊をあらわすは、幽光(奥深い光)遠く輝き、泥洹(涅槃)双樹(沙羅双樹)の残華は、余薫(釈尊の御恩)なお郁(かんばし)し。涅槃常樂(涅槃の四徳すなわち常、樂、我、淨のこと。大般涅槃經に説く)の接化、今時に迄、無為実相(すべてのものは真実のすがたである)の徳用(釈尊の徳とはたらき)、来際に被らしむ。是をもつて、上乘一心(この上もない真心)の法供養、両面五十二類(すべての生類を五十二類とした)の供具を捧げ、万行首楞の秘密咒、おのおの異口同音の仏事を作す。伏して願わくは、法界、偏ねく無量声光の告(はかりしれない限りない仏のみ教え)に驚き、那類(すべての生きもの)、悉く如来常在の化(釈尊の永遠の教え)に預(あず)からんことを。

謹んで疏。

本尊(ここでは永光寺のご本尊釈尊) 哀愍し(あわれみたまえ)

謹んで疏。

賢聖（賢人や聖者たち） 悉知したまえ（うけいれたまえ）

元亨四年（一二三四）二月一日 第五十四世法孫嗣祖比丘・某甲（瑩山禪師を指す）等 謹んで疏。

恭敬 疏上

黄紙 南閭浮提大日本国某州道某郡某郷住持某甲謹封

涅槃 如来

疏を宣べ罷みて、啓唱諷經、常の如し。主人、坐具を収めて、起立して行道（読經中に遶行すること）す。また諷經おわる時、焼香し、礼三拝す。維那、回向に曰く。

上来、楞嚴秘密神咒を誦する功德は、今日入般涅槃本師釈迦牟尼如来大和尚に供養し、もつて法乳の恩に酬いんことを。十方三世云云（読經回向のおわりに必ずとなえることばを指す）

三節（釈尊の降誕会、成道会、涅槃会のこと）ともに、この回向を用う。但し、誕生は今日降誕。臘八は今日成道。（原漢文）

b、『涅槃講式』

涅槃講式

先總礼

拘尸那城跋提河沙羅林中

雙樹間頭北面西右脇卧

二月十五夜半滅

次導着座 法用 表白

謹敬白一代教主三身即一非滅現滅寂後入滅

釋迦牟尼如来十方來集五百世尊三世十方諸

佛善逝大般涅槃求甚深妙典八万十二權實聖教

迦葉德王諸大菩薩堪那洋阿難諸聲聞衆大自在天尸

素大梵釋提桓因護世王四禪六欲天天衆乃至沙羅

林中五十二類自界他方一切衆會都尽窮法界常住

而言支釋尊大恩不可思議等數不可算盡

譬喻不可罄顯山竹猶有限海滴又非幾滴成以

來五百塵點慈悲護念利生方便置而不論應

世以來八十余年在世滅后三論四悉思而可報

從王宮誕生現三十二種之嘉瑞至角城唱滅

受五十二類之供養。生身始終節之幾。巨益法輪。
半滿會之幾。開悟就中敷教網於三周。濟苦海
之沈淪。轉法輪於五濁。運邪山之迷徒。末世恩德我
等所仰也。故今迎二月十五嘉辰。當如來圓寂期。
想像涅槃會之儀式。應募沙羅林之古席。調五
十二種珍妙供具。擬五十二類。取後供養。備餅菓
茶禪隨分。甘饌。准純陀長者。淨妙香飯。冀以令
日結緣。必期來世。值遇斯會。旨趣蓋在於斯。今
述涅槃會儀式。將植慈惠善根。畧有五段。一明
如來入滅儀式。二明大衆悲歎行相。三明寂後供
養作法。四明常住佛性妙理。五明發願面向。旨趣
伏願世尊哀愍納受。
第一明如來入滅儀式者。教主釋尊一期。化緣薪
火。八相應用。火滅之時。赴拘尸那城力士生地。阿夷羅跋
提河畔。沙羅雙樹之間。是三世諸佛入涅槃之初也。勅
力士掃治道路。命阿難令設床座。佛壽八十年。
春二月十五。朝自面門放五色光。以神力出大音聲。
其光照大千。其聲至有頂。依此。青光之告人天。

大會五十二類悉集。吉祥福田地。庭沙羅雙樹間。搖三
十二由旬。以大衆充滿。無有間隙。毒蛇視即殺人。毒虫
觸即害物。惡鬼奪人精氣。惡獸敗人血肉。乃至十
六種行惡之輩。皆生慈心。如父如母。牙致親昵。如下兄
如弟。有恒沙金翅鳥。不食一龍子。有無量夜叉王。不
殘一人類。猛獸牙。毛毒虫。各交頸。各捧最後供養。
皆悲如來滅度。余時世尊。一日夜之間。說大般涅槃經。誘
衆會心。演說已訖。漏剋漸闌。將至中夜。坐七宝
獅子床。中百福莊嚴。手脫却身。著僧伽梨衣。
顯出紫磨金。師子相胸。普告大衆。言我昔
無量劫間。難行苦行。捨頭目髓腦。投身肉手足。皆
是為汝等衆生。故不啻遂願。大悲本願。今出五
濁惡世。既唱八相成道。若拜尊顏。聞音聲。觸
光明。見神變者。皆無不得解脫。如來出世。尚希
有於優曇華。汝等今以宿福深厚。寂後值我。
化緣已畢。今將涅槃。汝等以深心看我。紫磨金
金色身。如此坐。師子床上。昇虛空中。上下往復。

合二十四遍每度告大眾言我將涅槃汝等以深心
看我此紫磨金色身如是殷勤相示已還著袈裟
繫帶即於七宝床上頭北面西右脇卧而卧尔時眾
會正見如來入滅儀悲歎心幾哉

抑我亦交何刀山劍樹之下不臨如來圓寂之庭沈何

三途八難之厄不列五十二類之數思宿因拙不及禽

獸棄機緣淺劣於蜣螂空在滅後只對尊像而

流淚徒坐邊園遙聞遺跡亦斷腸仰願釋尊

系哀弟子誠心將垂廣大利益仍大眾各作臨涅槃

會之想可奉稱讚禮拜釋迦大師最後入滅

慈悲尊像頌曰

以佛大神力聲光遍十方五

十二類眾皆集沙羅林

南無最後入滅釋迦大師

第二明大眾悲歎行相者阿泥樓豆告大眾言
大覺世尊今已入涅槃余時眾會聞此語已一時

悶絕一時躡地人天大會皆失身心懊惱苦惱

聲聞悉忘威儀叫喚彼法華經唱如來不當入

涅槃之時慙不指其收斂眾會之心猶緩普賢觀

說却後三月我當涅槃之日又隔多日月別離之悲

鞠踈今臨沙羅林之席至入涅槃之期人天大會幾

為悲屠肝就中人欲別語慙鳥欲死音和大聖世尊

入滅之冠每語莫不催悲圓寂之期既至寄別沙

羅林之間中夜將入涅槃其時多聞第一阿難尊者迷

亂失方佛法外護金剛密迹悶絕躡地大梵天王悲下

高臺開投身臥伏如來前釋提桓因山崩善法

堂揚聲踴躍涅槃場恒沙塵數菩薩聲舉身毛豎

遍體流血無量數人天大會涕淚盈眼悲感摧肝

振三十三由旬若千眾會皆懷戀慕深沈憂海乃至

山野之蹄江河之鱗莫不震吼悲哀乃至非情草木

皆以物思安也沙羅林風悵其色忽白跋提河水咽其

流忽濁。抵于十方木悉增愁色野獸山禽併悲

後哀哉惠日忽脫生死閻深金容永隱拜觀

無期夫漂滄海萬里之波者猶有著岸之取迷翠
嶺千里之雲者亦有歸故鄉之日大覺世尊一歸
寂滅後縱經無量劫永難可見身子目連先滅
度不見涅槃儀式阿難羅云統殘留付屬五百
世尊迦葉尊者後双林之場猶礼兩足於舍維
之前摩耶夫人敬為五夢告重拜一功德於金棺之
中知与不知值与不值来与不来見与不見皆是天
聖善巧莫不隨宜方便受我芽宿因是拙不拜
在也金容機緣遠隔既漏涅槃會坐不聞一期
化道難悲罪業深重僅披滅后之遺教深流
恋慕凌泉仍大衆各懷赤心哀渴仰之想可
奉稱讚礼拜釋迦大師最後入滅之像

我今所獻食願得無上報
一切煩惱結摧破無堅固

南无最後入滅釋迦大師

第三明取後供養作法者如來入滅取後供養其
儀廣博其相奇妙六欲四禪三界六道天龍八部
人天大會三十二由旬之四五十二類之非車各捧微
妙供具悉展取後供養所謂梵王燒深禪定
香天帝折歡喜亮慈闍浮提一切国王夫人采
女大臣長者各以人中取後妙供皆來作供養
乃至象王以鼻接蓮花末師子王採花菓至
鳥舍菓牛王流乳蜂王及花汁神仙作奴樂集樹
神持甘菓詣海神捧珍寶末惣三十二由旬衆會
如雲如霞五十二種供具如海其數不可計其
色不可辨其形而稱以宝蓋覆大千香水盥洗
盧衆會過塵刹信力徹骨髓思皆配令日苦
比當時設所供物如知塵所運信力亦多方並雅願
如來哀愍慈受虔愿微供准梅檀香義以輕深信
心齋純能誠心仍大衆各致殷勤之志可奉稱揚
礼拜釋迦大師最後入滅悲歎尊像頌曰

我今於中夜當入於涅槃
汝一心精進當離於放逸
南無最後供養釋迦大師

第四明常住佛性妙理者涅槃經云一切眾生悉有佛性如來常住無有變易一切眾生悉有佛性者凡有心者皆備佛性具此性者莫不成佛所以新善闡提邪見眾生定性二乘無性有情本有常住之理本來成佛之性無不足之極食蚊蜚鷦鷯云鳥三身功德之種胸中暖多百由緒那洞然猛火應解脫安樂之性無虧減下阿鼻城有情同備此理如九重洲有如意珠上有頂天衆生皆此性如三山頂生不死藥如振雄雞野渡鷺身中山禽棲鹿思心重本覺如來儼然常住凡丈具薄之類雖見知實相真如之理無有缺減三乘五乘七方便九法界皆備佛性悉可成佛者也次如來常住

無有變易者此明如來常住不滅永離無常遷變相也又本覺如來常住三德秘藏大覺涅槃自覺法樂無有間斷鎮居四德莊嚴常寂光土壽命無量不可窮今周遍法界極山川數澤何處非見盧身止常在具山安成住壞空何時無遮那依正雖然若久住於世者有鈍根少智者著相憍慢者中起憍恣散怠之心於入憶想妄見之網劇業磨盡金之姿不生希有難遭之想渴慕常在不滅之佛不務究竟解脫之道依之非滅現滅入無餘圓寂當於此時青蓮能發白毫掩光金河水咽双林風鳴設雖憍恣散怠之輩誰人不生入滅之悲設雖薄福少德之類何者不勵出離之計佛以是方便化難化衆生而安見不滅度常在此說法若衆生有機時便周遍法界之身示誕生於毘藍尼園之曉月若衆生無機時隱常在具山之安唱寂滅於沙羅林之夕嵐然則王宮誕生皆是與物結緣方便双林入滅莫不濟度利生善巧性相常然之身居寂光土無去來遷然常住之體

真善妙有離生滅既說一切眾生悉有佛性鐵床
之上黃金殿尚鮮亦明如來常住無有變易金棺
之中白毫光耀奈落尖底安樂解脫之性完然無
缺梅檀烟中卅果青蓮之相鮮研如故涅槃大經大
意取要在斯彼統間常住二字巨益猶不虛況
常觀本有三佛勝利豈唐捐哉仍大眾諸共深信
佛性常住圓極妙理可奉稱讚禮拜大般涅槃亦妙相

頌曰
如來入涅槃如其不還者
我等諸眾生悉無有救護

解脫之道依之非滅現滅入無餘圓寂○當于此時青
蓮能發白毫掩光金河水咽双林風悵設雖憍恣狀
急之輩誰人不生入滅之悲設雖薄福少德之類何者
不勸出離之計佛以是方便化難化眾生而每具不
滅度常在此說法若眾生有機時便用遍法界之
身示誕生於毘藍尼園之曉月若眾生無機時隱

常在云山之安唱寂滅於沙羅林之夕風然則王宮
誕生皆是与物結緣方便双林入滅莫不濟度利生善
巧性相常然之身居寂光土無去來雖然常住之
真善妙有離生滅既說一切眾生悉有佛性鐵床
之上黃金殿尚鮮亦明如來常住無有變易金棺
之中白毫光耀奈落尖底安樂解脫之性完然無
缺梅檀烟中卅果青蓮之相鮮研如故涅槃大經大
意取要在斯彼統間常住二字巨益猶不虛況
常觀本有三佛勝利豈唐捐哉仍大眾諸共深信
佛性常住圓極妙理可奉稱讚禮拜大般涅槃亦妙相

頌曰
如來入涅槃如其不還者
我等諸眾生悉無有救護

南無常住佛性大涅槃甚深妙典釋迦大師
第五明發願回向旨趣者我等適生教尊末法
中終列滅後遺教數雖值聖教如說不修行如教

不解了難着如眾不持戒律不修梵行。經讀經
典如魚食不適礼佛像如牛向方今聞双樹泪洎之
儀即發一念志慕之心對涅槃形像之前泣致三
業供養之誠所謂設微供所運散惡真樵夫之昔緣
素童子之今戲遙期花林苑之值遇以待龍花
樹之開發又願世之恩所生父母共生極樂同證
法恩乃至願緣運緣惡親知識等會此願皆
成佛道等願

唯願如來哀愍我 常令得見大悲身
三業無倦奉仕恒 速出生死歸真際

南無生之世值遇釋迦尊自他法界平利益

願以此功德普及於一切

我等與衆生皆共成佛道

右年月日中行多次序者

洞谷第一祖堂大和尚為後昆所設也然當

山紀綱察常佳之曰本字畫漫滅編次不正曷
慨念之久矣嘗應永冬十月愚蒙同阿諸老之
尊命領當山之主盟正身仍勝此行託而以倫紀綱察
之公用者喜償素志矣雖然刀刀東東手手毫毫
之謬只恐家醜外揚貽誚傷人正身不勝惶懼戰栗
之臻伏覲后臨見君子空才鑿改正而為予雪屈矣
勿袖慈愍之手幸甚昔應永正身癸卯春正月書
當山開闢堂山祖師五世玄孫比丘大容梵清誌
宅行現之本有文容和尚總持寺住之裡依本破損寫毛
書旃盾此枝軒然文明九年丁宗嶽超禪師宗圖寺住
時自筆書然明應二年癸丑臘月日層永積雪座而
衆俱曹和尚呵冰硯凍筆自筆書旃
昔明應十年三月日
當山開闢無端大和尚五世法孫巨岳麟廣當佳之裡
中書者也諒諒爾字誼三寫烏焉成馬者手后覽見
之君子董之可也

主要参考文献

○ 仏垂般涅槃畧説教誡經（折本。刊行時期不明、江戸期か。加賀大乘寺蔵版）

○ 涅槃講式（折本。明和四年 帝都二条街 風月莊左衛門刊）

○ 国訳一切經 第十一卷 大正六年 国民文庫刊行会刊

○ 国訳大蔵經 第八卷、第九卷およびその附録 大正七年 国民文庫刊行会刊

○ 国訳一切經 第十卷 大正九年 国民文庫刊行会刊

○ 国訳大蔵經 第十卷 大正九年 国民文庫刊行会刊

○ 大正新脩大蔵經 第四卷 大正十三年 大正一切經刊行会刊

○ 大正新脩大蔵經 第十二卷 大正十四年 大正一切經刊行会刊

○ 大正新脩大蔵經 第四十四卷 昭和二年 大正一切經刊行会刊

○ 国訳一切經 印度撰述部 昭和八年 大東出版社刊

○ 仏教思想研究 宇井伯寿著 昭和十八年 岩波書店刊

○ 仏教經典史 宇井伯寿著 昭和三十三年 東成出版社刊

○ 新・仏典解題事典 水野弘元監修 一九六六年 春秋社刊

○ 瑩山禪師清規 東隆眞訳注 昭和四十九年 大法界閣刊

○ 河村孝道編著 諸本
対校 永平開山道元禪師行狀 建擲記 昭和五〇年

大修館書店刊

○ 続 曹洞宗全書 清規 講式 昭和五一年 曹洞宗全書刊行会刊

○ 中国仏教史 鎌田茂雄著 一九七八年 岩波書店刊

○ 禅学大辞典 上・下 禅学大辞典編纂所編 昭和五三年 大修館書店刊

○ 昭和修訂曹洞宗行持軌範 昭和六三年 曹洞宗宗務庁刊

○ 道元禪師全集 第三、第四卷 鏡島元隆校註 一九八八年 春秋社刊

○ 岩波仏教辞典 中村元ほか編 一九八九年 岩波書店刊

○ 聖財書簡抄 吉田光俊発行 平成五年 瑞応寺僧堂

○ 加賀大乘寺史 館 残翁 東 隆眞 今村源宗著 下出積與監修 一九九四年 北国新聞社刊

○ 大乘經典解説事典 勝崎裕彦ほか編著 一九九七年 北辰堂刊

○ 大般涅槃經 片山一良訳 平成七年 中山書房仏書林刊

○ 涅槃講式 平成七年 大本山永平寺蔵版